

一九七二年に公開された山田洋次監督の作品に映画「故郷」がある。瀬戸内海の小さな島を舞台に、「石船」と呼ばれる木造の石運搬船で生計を立てている夫婦の物語だ。

建設ラッシュに沸く高度経済成長期、石の運搬は大型の「鉄鋼船」が主流となった。主人公「精一」は、時代の波に乗り遅れまいと必死にもがくが、鉄鋼船を買う金はない。せめてエンジンを取り換えようとするが、船大工に無駄な抵抗だからやめた方がいいと止められる。そんなあらずじだ。

大きな期待を背負ってつまづいた二〇一二年の政権転落から五年。前原誠司代表にとって、民進党はまるで時代遅れの石船だったのかもしれない。支持率は低迷し、党勢回復にほど遠い状況が続く。維新の党と合流した昨年は民主党の名も捨て、心機一転を期したものの、東京都議選の大敗で「離党ドミノ」は止まらず、もはや進むのさえままならない状態に陥った。

そこへ行くと、小池百合子東京都知事が代表の希望の党は、さしずめ新進気鋭の鉄鋼船に映ったのだろう。

降って湧いたような衆議院の解散、総選挙である。「政権交代を実現する大きなプラットフォームをつくる。名を捨てて実を取る」。前原氏はこう叫び、石船を捨て、この鉄鋼船に乗り換えることを決めた。もし

「石船」と「鉄鋼船」

かすると政権交代という歴史の転換点に再び立ち会えるのかもしれない。興奮した頭で、前原氏の英断に内心、拍手を送った。

だが、小池丸は民進丸と反対方向に向かつて進み始めた。希望の党の衆院選約には「憲法九条を含めた憲法改正論議を進める」「現行の安保法制は憲法にのっとり適切に運用する」など、民進党の従来の主張とは相いれない文言が並ぶ。全員乗り移れるという触れ込みだったにもかかわらず、「排除」という名の乗船制限までついてきた。いずれ自民丸と船団を組むのではないかとの疑念もつきまとう。

民進党の前身の民主党は、旧社会党から自民党まで幅広い勢力が加わって発足した経緯から、憲法や安全保障を巡る溝が埋まらず、常に「寄り合い所帯」と揶揄されてきた。党内きつての外交・安全保障政策の論客とされ、憲法九条改正が持論の前原氏が、今回の合流劇を通じて党内リベラル派を切り捨て、憲法観を軸にした野党再編を目指したのなら（手法の是非は別にして）まだ分からないでもない。

しかし、一連のドタバタ劇を見ると、前原氏にそのような戦略があったとはとても思えない。どんな気持ちで選挙戦に臨んでいるのだろうか。ツイッターをのぞいてみると、こんな書き込みがあった。「無所属で出馬することを選んだ仲間や、枝野さん

ら立憲民主党の結成に踏み切った皆さんとは、安倍政権を倒すという点で、目指すところは同じです。『左右からの挟み撃ち』で連携できたらと思っています」

この稿が掲載される頃には選挙結果が出ているだろうが、衆院選公示後、新聞各紙にはこそつて「自公で三〇〇議席超」との見出しが躍った。そりゃそうだ。道内は別だが、道外で希望の党は立憲民主党候補がいる選挙区に次々と対抗馬をぶつけ、民進党系のリベラル勢力と戦う姿勢を見せている。

「挟み撃ち」ところか「共倒れ」である。これでは、小池氏と結託して「安倍一強」に手を貸したと言われても仕方ないではないか。

鉄鋼船に見えた小池丸も、気が付けば失速し、いつ難破船になるか分からなくなってきた。民進党内では、分裂した同党を衆院選後に再結集させる動きもあるというが、それをやすやすと受け入れるほど有権者は甘くないはずだ。

ちなみに、映画「故郷」の主人公精一は、やがて石運搬船の仕事を辞め、造船所の作業員に転職することを決意する。石船に見切りをつけた民進党出身者たちの行く末はどうなるのか。船の形にこだわるあまり、「理念」という積み荷の大切さを見失わないよう願うばかりだ。

ハ蒼V